
宇宙、作っちゃいました

谷津矢車

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宇宙、作っちゃいました

【Nコード】

N3695V

【作者名】

谷津矢車

【あらすじ】

軽音楽研究会に入り半年、覚えたカホンの演奏が板についてきた矢先、初ライブ前日にスランプに陥る「誠司」。そんな「誠司」の前にビッグバンを見届けに来たという男が現れた。空想科学祭2011（RED部門）参加作。

メトロノームがずっと針を振っている。時計の針のような先に取り付けられた分銅が右に左に、一定のリズムの中で揺れる。

しんとした八畳くらいの部屋には、ギターやベース、譜面台が所狭しと並んで誠司せいじの様子をうかがっている。しくじるんじゃないか、また間違えるんじゃないか、そう言いたげに。

誠司はそのリズムに自分の呼吸を重ねる。自分の呼吸をメトロノームのリズムに添わせてメトロノームを眺めていると、自分の中にメトロノームのリズムが乗り移ってくる。自分の心音さえもメトロノームに合わせて鼓動しているかのような錯覚に陥る。そして、自分の心音が痛いほどに高まってきたその瞬間、誠司はまたがっているカホンを叩く。

ただの四角い箱。何も知らない人はそう表現するだろう。事実カホンは椅子くらいの大きさの四角い木の箱だ。けれど、ただの箱じゃない。その中にドラム用のスプリングや鈴が仕掛けてある。叩き方や叩く位置を変えることによってその打撃音を変えることが出来る、その使い分けでリズムを刻むことが出来る。要は、誠司が叩いている箱は、ドラムセットの代わりが出来る立派な楽器なのだ。

リズムが乗り切った時には、意識せずとも手が自動的にリズムを刻む。鼻歌を歌いながらもリズムを刻むことが出来るはずなのに、今日に限っては全く上手くいかない。

叩けば叩くほどリズムが崩れてくる。眼の前に置いたメトロノームも、間違いを指摘する先生の教鞭のように針を揺らしていた。「ちくしょう」

誠司はカホンを叩く手を止めた。部屋の楽器たちを揺らしていたバス音が止んで、代わりに残酷なまでに正確に時を裁断するメトロノームの音だけが残る。

やべえ。誠司は心の中で呟いた。

明日が本番だつてなのに。
そう。明日が本番なのである。
人生初のライブだ。

ごくごく普通の大学生である誠司は世間一般の有閑大学生の例に漏れずサークルに籍を置いている。そのサークルというのが「軽音楽研究会」。要はエレキギターやベースを弾いてドラムを叩きラブソングやプロテストソングを歌うアレである。が、そもそもその誠司の選択は間違いだったのだ。それまで一回も楽器を持ったことのない奴が、大学で軽音楽サークルに入るなんて順序がおかしい。

軽音サークルに入ったにも関わらずまったくの素人だというのが露見したのは新歓コンパのときだった。それがバレた際の先輩の顔は、誠司の軽いトラウマになっている。

どうしよう、こいつ。

そう言いたげに、先輩は苦笑いを浮かべていた。すっかり顔を赤くしている件の先輩は、酔いのせいか苦笑いすらどこかご機嫌だった。コップから口を離してあんぐりと口を開けていた先輩は、口元の麦酒の泡を拭って誠司の頭から足元までをねめつけるようにして見回して、うーんと唸った。

『お前の服の方向性からして、リズム楽器とか行けるんじゃない？』
そもそも、酔っ払いの発案なんてまともに受け取ってはいけない。だが、この時の誠司は今より少しだけ若かった。『行けるんじゃない？』という先輩の言葉にクソ真面目に頷く誠司がいた。高校時代は炎天下の中で長い木製の棒で打ち上げられた真っ白いボールを追いかけるひどく難儀で汗臭い部活にいたから（なお補欠）、『先輩の言葉が絶対』という金言が大学に入ってもなお体から抜けていかなかった。

けど自分、リズム楽器つて言っても何をやったらいいか分からないんですけど……。

そう水を向けると、その先輩は破顔一笑、酒臭い息を誠司に向けた。

『じゃあカホンでもやったらどうだ？ 簡単だしよ！』

先の『服の方向性』云々と考え併せても、これは先輩のネタ発言だった可能性が高い。それが証拠に、先輩は誠司の『ありがとうございませう！』というマジな礼に顔をしかめて向こうを向いてしまった。だが、誠司には生憎ネタをネタとして受け取るだけのウィットがなかった。

ともかく、そんなこんなで地味なパーカッション楽器・カホンを始めることになった誠司は、あんまり演奏技術の高くないアコースティックバンドのリズム隊として活動することになった。

で、明日はそのヘタクソバンドの初ライブがある。

ライブとはいっても大したものじゃない。サークルが誇る人気バンドの前座。しかもそのバンド、どう考えても誠司たちのアコースティックなバンドを前座にするようなサウンドのバンドじゃない。会場はその人気バンド目当てで客が満席だろう。その客を白けさせるに決まっているのだ。とはいっても一回受けてしまった以上はやるしかない。

けど、前日になってカホンの調子が上がらない。カホンを叩き始めて半年。ようやくそれなりの音が出るようになったのに、すぽんと変なサイクルにでも入ってしまったのか、どうもリズムが上手く刻めない。ほんの少しだけ思い描いていたリズムから外れてひどく格好の悪いリズムになってしまっている。焦ってメトロノームとにらめっこしながらいくら叩いても、どんどん感覚がズレていく。悩むうちに手首の動きが悪くなっていく。そうするとまたリズムがガタガタと崩れ始める。先輩たちの間で語り継がれる、ダメ音ス^{おと}パイラルにハマってしまったのだった。

そうして気付けば、貸しスタジオで一人、もう二時間もカホンを叩く羽目になっている。

「ど、どうしよう……」

誠司はカホンの上で頭を抱えた。

明日だぞ？ おいおい明日だぞ？ どうするんだよ俺？

考えれば考えるほど、手が震えてくる。カホンを叩き過ぎてスツカリ痛みがマヒしている両手を目の前に掲げてみる。けれどそこには答えが書かれていない。ただ誠司の動揺を映すばかりだ。

「やべえ、面白くない。誠司は呟いた。」

カホンを叩いて半年。ようやく楽しくなってきたところだった。なのに、いざプレッシャーがのしかかってくると、掴んでいたはずの楽しさが逃げてしまった。そうして今はただ重圧のみが誠司を捉えて離さない。

と。

「あー。忙しそうなところ、ちょっと良いかな？」

誠司を呼ぶ声が出た。

頭を抱えていた誠司は思わず声の方を向いた。

そこにはパイプイスがこしらえてあって、そのイスに男がいつの間にか座っていた。長い足をもてあまし気味にクロスさせて、両手を組んだ足の膝の前で組んでいる。どう形容したらいいのか分からないボディラインに沿った形の黒服姿。淡い笑みを浮かべながら誠司を見据えている。

誰だ、という誰何すいかの問いを放つ前に、男は頭をちょこんと下げた。

「ああ、あんまり気にしないで。私はあくまで『見届け人』だから」

「見届け人？」

見届け人を名乗る男はふうんと鼻を鳴らした。

最初、何処かのバンドのメンバーが冷やかしに来たのだと思っていた誠司だったが、その男の言葉がそういう人間のものではない事実を目の当たりにしてその考えを改めた。

「……ってか、あんた誰？」

「いや、だから『見届け人』だよ、私は。あくまで貴方がたの言語で私のことを表すとすれば、だけどね」

「見届け人？ 何を見届けるんだよ」

さも自明のことであるように男は言った。

「ビッグバンの瞬間、だよ」

は？

訳が分からず固まる誠司を尻目に、その『見届け人』は感心したように嘆息した。

「へえ、貴方たちはビッグバンを知っているのか。いやあ、嬉しいなあ」

「何言ってるんだよ、そんなの学校で習うじゃないかよ」

高校時代、朝練が終わってすぐの地学の時間で、その時に半ば眠りながらその単語を聞いたような記憶がなきにしもあらず。

けれど、『見届け人』は首を横に振った。

「いやいや、私は色んな宇宙を見ているけど、ビッグバンを識る存在が誕生する宇宙は極めて稀なんだ。誕生の膨張規模によつてはすぐ潰れちゃったり、安定的すぎて鉄しかない宇宙が誕生しちゃったりするんだよ。しかし、この宇宙はすごいね、ほどよくカオスとコスモスが釣り合ってる。おかげで貴方たちが存在できるんだ。この奇跡のバランスをもつと感謝しないとね」

訳が分からない。何を言ってるんだろうこいつは。

誠司の戸惑いをよそに、『見届け人』はその手をすつと差し出した。

「ささ、早くさっきの『ゆらぎ』を続けてくれ。遠慮は無用だ。早くその両の腕でポコスカその箱を叩きたまえ」

「へ？」

思わず誠司はまたがっているカホンを見下ろした。

「カホンが何だっけ言うんだよ」

「それが何なのかなんて関係ない。私は単に、その箱の放つ『ゆらぎ』を待っているだけだ。そして、その『ゆらぎ』から宇宙が誕生する瞬間を見届けに来ただけだ」

いよいよ訳が分からなくなってきた。

小首をかしげる誠司。

すると、『見届け人』も首をかしげた。

「おや、どうやら貴方はそこまでビッグバンに詳しくないみたいだ

ね

「そりやそうだよ！ 俺は文系だから！」

「まあいいか。ちよっとビッグバンについて話そうか」

『見届け人』はパイプイスにもたれかかりながら、まるで昔語りでもするかのようにして語り始めた。

原初、そこには何もなかった。だが、何もないはずのそこには『ゆらぎ』があった。その『ゆらぎ』は永遠の無の中をずっと流れている。だが、何かの拍子でその『ゆらぎ』が集約され、ある瞬間に局所的に『ゆらぎ』が一つの激流となる。だが、その激流は無限の無の中では無力。すぐに無に還る。しかし、その『ゆらぎ』の激流は、無の中から泡を生む。無の中から切り離された泡の中で、時間という概念が生まれ熱が生まれ粒子が生まれ因果律が生まれる。そしてその中でしか通用しない物質のふるまいの法則が決まる。爆発的に膨張しながら。そうして最後には、その泡は独立した一つの宇宙となる。それがビッグバンの正体なのだと。

意味が分からない。

僕の心中を悟っているのか、『見届け人』は言った。

「貴方はきつと、“この宇宙”の法則にあまりに毒されているんだね。けどね、その法則はあくまで“この宇宙”のもの。この宇宙が誕生した時に、はじめてその法則が誕生したんだ。“この宇宙”の法則をあてはめようとしても理解は及ばないさ。今私が話したのは、その法則さえも存在しないところの話なんだ」

頭がすっかりこんがらがってきた。

科学法則が存在しない？ この宇宙の法則？

はあ。

ため息をついた『見届け人』は続けた。

「簡単に言えば、君たちの宇宙が生まれたところは、君たちの知識では測れない一段上のところだということだ。そして、『ゆらぎ』によってビッグバンが起き、宇宙が誕生している。それを理解して頂ければいい」

なんとなく、わかった、ような気がする。

というより、分かったことにして、誠司はさしあたり気になることを聞いてみることにした。

「たしかあんだ、今、カホンを叩くことで宇宙が誕生するようなことを言ってたよな？ どういうことだよ？」

すると、『見届け人』は薄く微笑んだ。

「とりあえず、叩いてみなよ」

おしゃべりの間にメトロノームのゼンマイはすっかり切れていた。メトロノームの針は丁度真ん中で沈黙して、既に僕の演奏を聞く姿勢に入っていた。『見届け人』が押し黙ると、もうそこには何の音さえもなかった。もしかすると、『見届け人』なる男の言う無の世界というのは、こういうところのことをいうのだろうか。

誠司は自分の心音を聞いた。いや、自分の魂が刻むビートを聞いた。そして。

両手を繰り出して、股がるカホンを叩いた。

ビリビリという感覚が両手に響く。両手だけじゃない。腕も、胸も、腹も。脚も足も。頭の奥までその振動が響く。鼓膜に飛び込んでくるバス音の揺らぎが、また誠司のリズムに拍車をかけていく。

もっと、もっと、もっと！

なんだか今日はすごいところまで行けそうな気がして、ひたすらに叩いた。やがて小賢しい考えが誠司の頭から抜けていく。そこにはただカホンと両手があった。自分の身体感覚まで忘れ、ただ両の手が作り上げるリズムの世界に自我を埋没させていった。

そうして曲のオーラス場面、確かにある音が誠司の鼓膜を揺らした。

完璧な、いや、完璧すぎる音だった。

先輩から聞いたことがあった。

打楽器にはスイートスポットがある。『大体この辺』と表現される辺りをスティックや手で叩くことにより音を出すのが打楽器だが、

この時誠司が叩いた場所、それは何年もかじつていても一度あるかないかの、スイートスポットのさらに中心点を捉えた一打。今、誠司が叩いたのは、その神の一打だったのだ。

その瞬間、『見届け人』が声を上げた。

「す、すごい！ この泡は……」

『見届け人』は既に誠司のことで見ていなかった。どこか虚ろな目をしながら、誠司の背後にある何かに向かい恍惚にも似た表情を浮かべていた。

「すごい！ すごすぎる！ カオスとコスモスの配合が絶妙！ この宇宙に匹敵する、いや、この宇宙を超える泡が出来た！ こんな美しいビッグバンは初めてだ！」

「ちよ、ちよつと待てよ！」

「は、何か？」

誠司の方に振り返り不満げに小首をかしげる『見届け人』に向かって、ありつたけの疑問をぶつける誠司。

「なんでカホンの音で宇宙が誕生するんだよ！ それに、ビッグバンが今起こってるのかよ！ 俺には何も見えないぞ！」

「当たり前じゃないですか」

『見届け人』は細い指を一本立てて振った。

「貴方はこの宇宙がどこから誕生したか、ご存知ですか？ ご存知ないでしょ？ なぜならこの宇宙が生まれたところは貴方の持ち合わせている科学では観測できないところだからです。変な話ですが、この宇宙がこの箱みたいなものから生まれたのだとしても貴方に否定は出来ません。だって貴方にはそれが観測できないんだから。そして、貴方が叩いた箱から宇宙が生まれても、貴方はそれを観測することは出来ません。だって、そうやって新たに生まれた宇宙は、あなたの存在するこの宇宙とは違う法則の元に存在する宇宙だからです」

科学の法則の外にあるものは、もはや科学では語れない。

確か、高校の授業の時、地学の先生が言っていた気がする。誠司

は遠い記憶を引っ張り出しかけていた。

ビッグバンが起こったことは知ってるな。でも、お前たちが思う以上にビッグバンは凄いものなんだぞ？　たとえば時間。これだつて、ビッグバンの後に誕生したものだ。たとえば熱。あれだつてビッグバンの後に誕生している。原子や分子だつて、ビッグバンが起こつてしばらくして、原始宇宙が冷え始めた頃に誕生している。空間だつて、ビッグバンによる膨張によつて誕生したんだ。

じゃあ、ビッグバンの前には何があったのか？　それはもう我々には分からない。なぜなら、我々人間の持つている尺度である「時間」や「熱」「空間」などに支えられた科学という学問体系は、ビッグバンが起こった世界でしか通用しない法則だからだ。ビッグバンの前のことは逆立ちしても分からない。

ビッグバンの瞬間の向こう側を研究している学者もいるけど、殆ど言っていることが宗教と変わらないしなあ。

頭を掻きながら、黒板の前で「ビッグバン」と大書した先生は、確かにそう言っていた。

なんとなく、『見届け人』の言わんとすることが分かったような気がした。『科学』というのはあくまで『この宇宙』でしか通用しない取り決めでしかない。そして、他の宇宙を科学で理解は出来ない。なぜなら『科学』が通用するのは『この宇宙』の中だけだからだ。その外を観察するには、あまりにも科学はピントはずれの望遠鏡なのだ。

「ああ、なんとなくわかつて……」

来たような気がする、という僕の言葉は、部屋中に反響した。

もう部屋の中に『見届け人』の姿はなかった。始めからそこに誰もいなかったかのように、気配すらも残していなかった。

誰もいなくなった部屋の中で、誠司はまたがるカホンを叩いた。

反響するバス音を聞きながら、心の中で誠司は呟く。

俺のカホンが宇宙を創る、か。

いくら想像してみても、この四角い箱から宇宙が生まれたなんて

到底信じられない誠司がいる。けど。

誠司はあの瞬間の、神の一音を思い出していた。

あの瞬間、目が覚めるような思いだった。たった一つの音でしかないけど、その音が確かに誠司のハートを強く揺さぶった。あの瞬間、自分を取り巻く世界が色を変えたような気がした。

何より、また音楽が楽しくなってきた。

宇宙を創ったかどうかなんてわからない。けど。

「音楽つてすげえ、世界を変えるんだな」

ポコポコと軽快なリズムを刻みながら、誠司はつぶやいた。

その瞬間、誠司の耳に、あの『見届け人』の言葉が響いた。リズムを叩きながら見渡してみても、部屋の中に『見届け人』の姿はない。

気のせいだということにして、誠司はカホンを叩き続けた。このリズム、この音だったら、明日のライブは間違いなく成功する。その確信を胸に秘めながら、誠司は音の世界の深奥へと迫っていく。今の空耳を頭の中で繰り返し返した。

「『ゆらぎ』は世界を変えるんじゃない。宇宙を創るんだ」

そうなのかもしれない。

誠司は呟いた。なんだか愉快的気分だった。

「俺、宇宙を作っちゃったのかもしれない」

(後書き)

スペシャルサンクス 檀敬さん

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3695v/>

宇宙、作っちゃいました

2011年8月21日03時25分発行